

修士論文（要旨）

2018年1月

複言語話者の言語意識及び複言語使用行動に関する考察  
— 香港の大学生と社会人の調査から —

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

216J3005

彭翠玲

Master's Thesis (Abstract)

January 2018

An Investigation into the Language Identity and Language Usage of  
Multilingual Speakers:  
From a Survey of University Students and Workers in Hong Kong

Chui Ling Pang

216J3005

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

## 目次

第1章 研究の背景と目的	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
第2章 先行研究	7
2.1 先行研究の概観	7
2.2 用語の定義	10
2.2.1 複言語主義の定義	10
2.2.2 複言語意識・複言語アイデンティティの定義	11
2.2.3 シティズンシップの定義	11
2.2.4 多言語社会の定義	12
第3章 調査概要と分析方法	13
3.1 調査概要	13
3.1.1 調査方法	13
3.1.2 調査内容	14
3.1.3 調査協力者	15
3.2 分析方法	15
3.2.1 分析方法：SCAT	16
3.2.2 本研究におけるSCATの援用方法	16
第4章 大学生の事例	18
4.1 大学1年生：EJ1の事例	18
4.1.1 複言語ポートレート	18
①記述と分析	18
②考察	20
4.1.2 複言語の使用行動・学習経験	24
①記述と分析	24
②考察	26
4.2 大学卒業生：EJ2の事例	27
4.2.1 複言語ポートレート	27
①記述と分析	27
②考察	29
4.2.2 複言語の使用行動・学習経験	33
①記述と分析	33
②考察	34
第5章 社会人の事例	39
5.1 社会人：MJ1の事例	39
5.1.1 複言語ポートレート	39
①記述と分析	39

②考察 .....	41
5.1.2 複言語の使用行動・学習経験 .....	45
①記述と分析 .....	45
②考察 .....	46
5.2 社会人：MJ2の事例.....	51
5.2.1 複言語ポートレート .....	51
①記述と分析 .....	51
②考察 .....	53
5.2.2 複言語の使用行動・学習経験 .....	56
①記述と分析 .....	56
②考察 .....	57
第6章 総合的考察.....	61
6.1 学習動機及び学習継続に影響を与える要因とその相互作用.....	61
6.2 WTCにおける複言語行動 .....	63
6.3 世界の言語としての英語の地位 .....	65
6.4 新しい言語の学習に既習した言語の経験を活用する考え .....	66
第7章 まとめと今後の課題 .....	68
7.1 結論 .....	68
7.2 本研究の意義.....	72
7.3 本研究の限界.....	73
7.4 今後の課題 .....	73

参考文献  
添付資料

## 巻末資料目次

巻末資料 1 : 調査同意書 書式.....	- 1 -
巻末資料 2 : インタビューの文字化のデータ一部 (EJ1) .....	- 2 -
巻末資料 3 : インタビューの文字化のデータ一部 (EJ2) .....	- 4 -
巻末資料 4 : インタビューの文字化のデータ一部 (MJ1).....	- 6 -
巻末資料 5 : インタビューの文字化のデータ一部 (MJ2).....	- 8 -

## 要旨

グローバル化に伴い、ヒトやモノの移動にも変化があり、多言語・多文化社会も広がる。言語と文化の境界を超え、複数言語で双方向的な行動ができる市民を育てることが急務になっている。本研究は、香港の複数言語話者を調査し、複数言語意識と複数言語使用行動を分析・考察することを目的とする。

本研究では、実際の接触場面で複数言語使用をしている香港の大学生と社会人 8 名を調査対象にした。具体的には、①(姫田 2015,p.138)の「言語ポートレート」を参考にし、「複数言語ポートレート」を用いて調査を行い、その結果に基づき、②半構造化インタビュー調査を行った。母語以外複数の言語を学び始めた理由、学習動機づけ、継続目的、学習ストラテジー、実際の生活や職場で複数言語使用するときの感情・言語選択理由などについて尋ね、得られた回答から個人の言語学習経験、言語使用場面の経験に焦点を当て分析を行った。分析方法は、大谷(2011)が開発した SCAT 分析方法を用い、調査対象の着目すべき語句などを拾い上げて分析し、言語意識や言語行動についてテーマ・構成概念の順にコードやストーリーラインを作り、概念化し、考察した。

大学生の事例である EJ1 の複数言語ポートレートでは、最も大切な言語は英語と日本語だとわかった。心臓に日本語と英語を位置付けたことからそれらが心に響く感情を持つ言語だとわかった。複数の言語を使う場面では、初対面で留学生に会った際英語を使用していることから、英語が最優先される言語であり最も効果的なコミュニケーションの道具だと考えられる。また、EJ2 は多様なコミュニティに積極的に参加しているため外国語学習の意欲が強くなり、目標言語を駆使し、個人の感情・複数言語意識を用いて自己実現を果たしている。EJ2 は非母語話者顧客との仕事場面で異文化や、日本語使用への不安を持っているので、<ヘルメットのような保護作用>が発揮できる英語を第一優先の言語として使用している。そこには英語は仕事において悪い評価にならないような存在という複数言語意識行動の特徴が示されている。

社会人の事例で、MJ1 は日本語学習へ投資し、物的資源(香港の日系企業の仕事)と象徴的な資源(日本語の能力)という報酬を得た。仕事のタスク達成のためには、重要な情報のみを通訳するだけで十分だと気付くようになった。伝達能力とインターアクション能力をさらに身につけることが複数言語行動の緊急課題だと考えている。MJ2 は接触場面の増加・拡大によって、多様なコミュニケーション・ストラテジーを使うようになり、結果的に自身の話題が豊富になるという変容を体験した。「Language is Power」という信念を持つ MJ2 は、複数の言語ができることが視野を広くするという複数言語意識を堅持している。

本研究の結論では、調査対象の複数言語意識の形成は、理想の自己を実現する過程で行われたことがわかった。複数言語の言語能力に対し、自己決定で要求度を定めることが明らかになった。複数言語使用では、相手に合わせること、及び自分の利益を得ることを基準として、複数言語を選択しコードスイッチングしている調査結果が得られた。多言語使用の接触場面で生じる問題に対する言語使用行動は、CALP(学習言語能力)と BICS(伝達言語能力)を大切にしているほか、多様なコミュニケーション手段も使用していることがわかった。

本研究の意義は、複言語ポートレートを使用し、調査対象者が既習した複数の言語と、それぞれにとってのその価値、存在意義を絵で示してもらい、さらにそのような位置づけについて語ってもらったことである。さらに、複言語学習者が生涯学習などを通して、複言語使用者の役割を担うようになるプロセスを可視化したことである。今後実際の接触場面での複言語使用の機会が増えると同時に、様々な複言語コミュニケーションの問題が生じると思われる。本研究の考察から得た問題解決のための方略が、今後の言語教育の改善に役立つことを望んでいる。

最後に、この研究は調査時間と調査対象の人数に限界があり、個別的な要素と社会的な要因により異なる調査結果が出る可能性があるため、一般化はできない。言語意識は個人的に変化し得るものであり、本研究で記述した全ての調査協力者から得たデータを考察した言語意識も流動的に変化する。今後、ほかのコミュニティの様々な複言語学習者を研究対象にし、多様な接触場面で彼らの複言語意識と行動を考察し、それぞれの多言語社会における複言語使用の問題と解決方法が対照、分析されることを今後の課題としたい。

## 参考文献

- 石川薫(2012)「香港における環境 — 三語の行方 —」『東京女子大学 言語文化研究 (2012年度)』 21, 20-33.
- 大谷尚(2011)「SCAT: Steps for coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学: 日本感性工学会論文誌』 v.10, n.3, 155-160.
- 小泉聡子(2011)「多言語話者の言語意識とアイデンティティ形成 — 「ありたい自分」として「自分を生きる」ための言語教育」細川英雄(編)『言語教育とアイデンティティことばの教育実践とその可能性』春風社. 138-158.
- 小泉聡子(2011)「複言語話者にとってのことばの意味 — 複言語主義的観点から —」『桜美林大学大学院言語教育研究科 言語教育研究(2011年度)』 2, 31-41.
- 西山教行 (2010)「複言語・複文化主義の形成と展開」細川英雄・西山教行(編)『複言語・複文化主義とは何か — ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版. 22-34.
- 西山教行・細川英雄・大木充(編) (2015)『異文化間教育とは何か グローバル人材育成のために』くろしお出版.
- 姫田麻利子(2015)「間を見つける力—外国語教育と異文化間能力」西山教行、細川英雄ほか 単著『異文化間教育とは何か—グローバル人材育成のために』くろしお出版. 118-140.
- 福島青史(2015)「「共に生きる」社会形成とその教育 — 欧州評議会の活動を例として」西山教行・細川英雄・大木充(編)『異文化間教育とは何か グローバル人材育成のために』くろしお出版. 23-41.
- 三國喜保子(2016)「生涯学習における学習の必要性と意味づけ — 香港における成人日本語学習者の事例から —」『桜美林大学大学院言語教育研究科 言語教育研究(2017年度)』 7, 23-33.
- 宮副ウォン裕子(2007)「多言語スピーチ・コミュニティー—香港における日本語の学習・教育— Connection, Cultures, Communities からの一考察—」『日本語教育』 133, 38-45.
- 八島智子 (2008)『外国語コミュニケーションの情意と動機—研究と教育の視点—』関西大学出版部.
- Cummins, J. (2005) Teaching for cross-language transfer in dual language education: possibilities and pitfalls. *TESOL Symposium on Dual Language Education: Teaching and Learning Two Languages in the EFL Setting: USA*, 1-17.
- Gardner, R. C., & Labert, W. E. (1972) *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- J.V.ネウストプニー(2003) 第35版 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書.
- Norton, B. (2013) *Identity and language learning: Extending the conversation (second edition)*. Bristol: Multilingual Matters.
- Peter D. MacIntyre, Zoltán Dörnyei, Richard Clément and Kimberly A. Noels (1998) Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*, Vol. 82, No. 4 (Winter, 1998), 545-562.

## 参考サイト

- 欧州評議会言語政策局(2006)「ヨーロッパの複言語教育: 半世紀に渡る国際協力」(L'éducation plurilingue en Europe: 50 ans de coopération internationale) (英) ([http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/reportforum\\_EN.asp](http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/reportforum_EN.asp)? 2017年1月14日閲覧)
- Syllabus Cambridge International AS Level For HKEAA Centres 2016, Cambridge International Examinations ([http://www.hkeaa.edu.hk/DocLibrary/HKDSE/Subject\\_Information/other\\_lang/OtherLang-Syllabus2016.pdf](http://www.hkeaa.edu.hk/DocLibrary/HKDSE/Subject_Information/other_lang/OtherLang-Syllabus2016.pdf) 2017年5月15日閲覧)